

紀 要 第三十八卷 第一号（通卷四十九号）一四～二四（二〇一四）

## 『蓮如上人御旧跡絵抄』の周辺

藤川 玲満

### 一 『蓮如上人御旧跡絵抄』の概略

秋里籬島の末期の著作に『蓮如上人御旧跡絵抄』（半紙本一冊、文化八年三月京都書肆伊豫屋佐右衛門刊）がある。本願寺八世である蓮如の旧跡を七〇箇所余り掲げて簡略な解説を施す内容で、挿絵が七図入り、全三二丁という小冊である。伊豫屋佐右衛門と丹後加悦の宮嶋佐兵衛が連名の初板と、名古屋の皓月堂丈助による後刷本があるが、どちらも現存の確かめられる板本はさほど多くない<sup>1)</sup>。

籬島の著述を概観すると、安永五年刊の軍書『信長記拾遺』に始まり、同九年に『都名所図会』が出版され、以降、文化二年刊『木曾路名所図会』に至るまで各地の名所図会を立て続けに執筆する。そうしたなか寛政一一年刊『源平盛衰記図会』からは軍記の図会化作品も手掛ける。これらの図会物を主著としながら、他に俳諧書、小説、実用書の類も著す。そしてこの文化八年刊『蓮如上人御旧跡絵抄』は、籬島の著作として確実なもののうち<sup>2)</sup>、最後から三作目に位置する。なお、同 year 秋に出された随筆で西海路の奇談の聞きと内容の『赤星さうし』（半紙本三卷三冊）も同じく伊豫屋の出版であり、伊豫屋佐右衛門が老年期の籬島と相携え、比較的小規模の書物を二作出したものと見受けられる。

本稿では、『蓮如上人御旧跡絵抄』について、作者周辺の事情および図会物の流行・展開との関わりと、蓮如関連書の系譜との関わりとの点から考察してその意味と位置付けを捉え、加えて本作の板元伊豫屋の業績を明らかにし、籬島周辺の近世中後期の書肆の在り方の一端を見たいと思う。

はじめに本書の概略を記しておく。籬島は序文に「近年御法流ますく繁昌して高祖の御跡をしたひ奉り関東二十四輩あるひは北国の御旧跡をめぐる人多し。然れとも道法遙けき所多し。南部仙台南は京都より三百餘里もあれば老人婦女など叶がたし。故に中祖の御旧跡を巡る人多し。其諸跡を記せるものなし。此度同行の進によりて其寺を記侍る。」と著述の意図を述べている<sup>3)</sup>。これについて青木馨氏は「この時期すでに『二十四輩巡拝図絵』や『遺徳法輪集』など、宗祖親鸞に関わる旧跡巡拝のガイドブックは広く出まわっており、いわばその蓮如版というべきものが本書である。」（『大系真宗史料』<sup>4)</sup> 解題）とされた。

本作は、近江から北陸地方の越前、福井城下、吉崎、加賀、若狭、続いて丹後から畿内の摂津、河内、大和、大坂、山城、そして再び近江に至る順で七〇余の旧跡を採録する構成で、その一項目の解説はおよそ次の如くである。

念佛山寶幢院超專寺 真野にあり。蓮如上人六十一歳の冬より六十三歳の春までこゝに御逗留なされ候地なり。開基高祖の御弟子明空坊六老僧第二なり。

大祖聖人 三十五歳の時はじめて御入來の地なり。

宝物 大祖聖人七十五歳の御影御真筆 蓮師御裏書あり。

玉日宮 御自画

蓮如聖人 御自画其外靈宝

記述事項は、所在地、蓮如との由縁、伝存する宝物であり、籬島の名所図会が、寺院の所在地、開基、本尊と作者、縁起、堂舎、什物、庭、景観や現況、行事の要素を取り上げていく書き方に通じ、これを約めたような形である。そして、このうち宝物を提示することが本作においてはとくに重要な意味を持つ。この点については次項で確かめたい。一方で、一部には旧跡を項目立てするのではなく、次のように書き綴る箇所もある。

越前敦賀の町を見て氣比社へ詣し此神前は真砂地にて白砂なり。これは遊行上人二世大願發起あり。土砂をはこび詣人を悦ばしむ故に、今にも願ひある者は真砂を神前に捧ぐ。これを遊行の砂持といふ。これより右の方へのぼる道坂多し。木の目畔といふ。一里ばかり登る嶺あり。こゝに家二軒ありて、多く爰にて憩ふ。それより一里ばかりくだれば、二ツ谷とて少しき在町あり。旅舎もあり。これを又一里ばかり下れば、今庄の駅に至る。

右は、越前の敦賀から今庄までの道中を略述したものであるが、このさき今庄にある旧跡の不図山本覚寺を掲げて解説した後、再び今庄から水落鳥羽の里までの道のりと、浅水から福井城下までの道

のりについても同様の形で繋いでいる。こうした部分については、籬島の紀行作品『天橋立紀行』（寛政七年成）<sup>⑤</sup>と似通う筆致が認められる。挿絵の七図は、山科御坊を描く遠景の一図と、蓮如の伝承を描く六図で、後者は「蓮師慈教寺を御建立の図」（近江国慈教寺）、「蓮師五歳の時名号を書したまふ図」（近江国善西道場）、「蓮師衆徒に追れて在家にしる居玉ふ図」（越前国辛平御旧跡）、「吉崎西御坊御鼻松の図」と「黄楊木御旧跡図」（ともに吉崎）、「大坂津村御堂の図」である。

## 二 籬島の周辺と浄土真宗、二十四輩物

本作の成立について、まず作者の伝記と著述環境、とくに浄土真宗との関連の点から考えていく。籬島と浄土真宗の関係について整理すると、つとに浅野三平氏が、籬島の著述に本作と『親鸞聖人洛陽御旧跡』二十四輩巡拝記（『大阪出版書籍目録』に文化三年九月出版とす）とがあることを見出され、籬島は文化期に仏書への進出を志しており、仏教とくに浄土真宗への強い興味があったと指摘された<sup>⑥</sup>。その後、近年に籬島が自身の伝記をしたためた書き物『秋里家譜』（国文学研究資料館蔵）の伝存が明らかとなり、これにより籬島が真宗本願寺派に改宗、帰依している事実が判明した<sup>⑦</sup>。

著作で真宗との関連が見出せるのは、『信長記拾遺』と『天橋立紀行』である。軍書『信長記拾遺』に関しては、これが石山合戦を題材とする点と、この書物の序者（應物堂無跡）が籬島と親交のあった真宗の僧侶である点がそうである。『天橋立紀行』では、この旅中に、籬島が丹後国宮津の真宗本願寺派真照寺の住職鸞十と、因幡

国智頭の真宗本願寺派光専寺の住職恵雄（この人物が『信長記拾遺』序者の應物堂無跡である）を訪れている。このような籬島本人の宗派との関係が、真宗中興の祖である蓮如の旧跡を著すことの素地の一つとしてまず捉えられよう。

さらに、籬島の周辺環境まで広げて見たとき、初期の著述を支えた京都の書肆吉野屋為八の活動が注目すべき点となる。吉野屋が真宗関連の書物と二十四輩物を蔵板・出版しており、これらの板権をめぐる展開と『蓮如上人御旧跡絵抄』とが近い位置関係に捉えられるのである。吉野屋の営業<sup>⑧</sup>は安永四年から文化八年まで確かめられるが、その創業期には、本願寺の御用書林としての活動が明らかになっている<sup>⑨</sup>。出版物では、安永四年に『浄土安心説法問答』と『真宗現益辯惑論』、安永五年に『指要抄詳解選翼』といった仏書を手がけており、安永八年には大谷派の先啓による二十四輩旧跡の解説書『親鸞聖人御遺跡記』（別称『大谷遺跡録』）を出版している。ほかにも刊年は不明ながら『親鸞聖人遺徳法輪集』と『親鸞聖人御旧跡廿四輩巡拝記』を求板板行し、『二十四輩道中記』『拮聚抄』『廿四輩記図』『廿四輩巡道記』を蔵板している。

ここで二十四輩の旧跡とその書物の成立について辿ってみると、『真宗大辞典』<sup>⑩</sup>に「世は太平にして諸国の往来容易なりしかば、観音霊場の三十三所、弘法大師の霊場八十八箇所に於ける如く、二十四輩寺院その他の旧跡地を巡拝するもの漸く多きを加ふるに至り、俄に宝物を分割して遺跡を設け、或は荒唐なる傳説を由緒として旧跡寺院を装ふもの多きに至った」（『二十四輩寺院』項）とされるように、近世において二十四輩寺院には、その乱立を招くまでの巡拝流行の実態があった。渡辺信和氏「二十四輩とその案内書」<sup>⑪</sup>

は、二十四輩物の諸書を系統立てて解説されているが、そのうちの元禄一三年刊『拮聚鈔』が、立項された寺院が親鸞とどのように関わり、どのような法宝物を下付され、伝持しているかを記すことに関して、その巡拝行為の具体像を「二十四輩巡拝ということが、最初は親鸞の遺跡を尋ねる旅であり、それに付随して親鸞の直弟子であった二十四人の僧侶の遺跡寺院に親鸞の遺宝を尋ねることになった、後々「二十四輩巡拝」の語によつてこの行為が括られるようになったものと知られる」とされた。親鸞旧跡の案内記における宝物の提示の意義、重要性が捉えられており、これが前項に述べた『蓮如上人御旧跡絵抄』の特質に通じていると言えよう。

続いて、二十四輩物の出版について、板権の移動に着目して考察する。まず二十四輩物の書目を、渡辺氏の前掲論文および筆者の調査したところに拠つて一覧に掲げる。そのうち吉野屋が板権を所持したと確かめられるものには、丸印を付す。

- 1 『親鸞聖人御直弟散在記』（写本）宗誓
- 2 『二十四輩諸国散在記』（写本）二卷、宗誓
- 3 元禄一三年刊『拮聚鈔』二卷二冊、天旭
- 4 宝永八年刊『遺徳法輪集』六卷七冊、宗誓
- 5 享保一二年刊『関東二十四輩巡詣記』一冊
- 6 享保一六年刊『親鸞聖人御旧跡二十四輩記』七卷七冊、竹内寿庵
- 7 寛延四年刊『御旧跡図彙』一冊、山田信斎
- 8 宝暦五年刊『二十四輩道中記』先啓（『大阪出版書籍目録』<sup>⑫</sup>と割印帳<sup>⑬</sup>による）
- 9 宝暦一〇年刊『親鸞聖人御旧跡廿四輩巡拝記』一冊、紅玉堂楓司
- 10 明和四年刊『親鸞聖人御旧跡二十四輩参詣記』一冊、嶋屋長次

○11 安永八年刊『大谷遺跡録』（『親鸞聖人御遺跡記』）四卷附一卷五冊、先啓

12 享和三年・文化六年刊『二十四輩順拝図会』前編五卷五冊・後編五卷五冊、了貞

○13 刊年不明『二十四輩記図』（『親鸞聖人御旧跡廿四輩巡拝記』）廣告による）

○14 刊年不明『二十四輩巡道記』（『親鸞聖人御旧跡廿四輩巡拝記』）廣告による）

これらは体裁と内容の点では、大本で大部の解説書（『拮聚鈔』『遺徳法輪集』『大谷遺跡録』）と、横本一冊の道中記の類（『親鸞聖人御旧跡廿四輩巡拝記』『親鸞聖人御旧跡二十四輩参詣記』）とがある。板権について見ると、吉野屋が過半の書目について所持していることが判る。吉野屋の蔵板は名所図会シリーズ等を手がけた後の営業の退転期に、多くが大坂書肆河内屋太助に渡っているが、二十四輩物の板権もこのなかに含まれると見える。本屋仲間の記録には、河内屋が地誌関係の求板書目に手を施して出版する件が散見されるが、そのうち大坂本屋仲間記録「出勤帳」<sup>14</sup>には享和元年に二十四輩物一四点の求板、『享保以後大阪出版書籍目録』には享和二年二月に『廿四輩御旧跡図』につき増補の申出の記事がある<sup>15</sup>。

そうしたところ、享和三年に『二十四輩順拝図会』前編五卷五冊が出版されている（後編五卷五冊は文化六年刊）<sup>16</sup>。前後編合わせて二六か国の三二七項目を収める内容で、著者は河内国の真宗大谷派専教寺の住職了貞、画工は竹原春泉斎、出版書肆は、前編刊記に京都の菱屋孫兵衛、江戸の松本平助、大坂の小刀屋六兵衛・海部屋勘兵衛・勝尾屋六兵衛・河内屋太助、後編刊記に江戸の松本平助、

名古屋の永楽屋東四郎、京都の俵屋清兵衛・菊屋源兵衛、大坂小刀屋六兵衛・河内屋太助が名を連ねる。『享保以後大阪出版書籍目録』によれば小刀屋によって大坂で開板されているが、前述のように二十四輩物を多種蔵板する河内屋が相板者である。

この作品が名所図会の派生作であることは、書物の趣向・体裁からも明白である。著者了貞の序には、書肆の側の需めに応じた著述であるとし、凡例には「先に遺徳法輪集 御旧跡二十四輩記 大谷遺跡録有 又二十四輩順拝記 参詣記 御旧跡図彙等皆其霊場の伝記にして巡拝の便する書なりといへども是に長きものは彼に短く前に充てば後に欠たり 今先書の載る所を皆集し国字俗文猶加るに図画を以てせるは童蒙婦女の視安からんが為なり」と、先行の二十四輩物諸書の備わるなか敢えて図会制作に乗り出す趣意が述べられるが、これはかつて都の案内書が数多あるなかで世に出された『都名所図会』の例に倣うものである。しかし続けて「編中御旧跡にあづからざる名所風景を記し又図画をも併せのせたり 是予が著述する所にあらず 只兒童婦女の観るに興あらん為とて書肆の利を射る計なるべし しかしながら是をもて此書を広むるの輔とならば是又ひとかたの方便なるべしと其儘に木に寿す」ともあるところからは、流行の図会様式を用いるこの書物が読者意識・売れ行きを前提としたものであり、著者の主意の外に企画性が強く働いていることが窺える。

以上をふまえて『二十四輩順拝図会』の成立を考えると、この作品は、籬島が創り出し、執筆してきた名所図会を踏襲するものであることのほか、真宗にゆかりの深い吉野屋が創業期に二十四輩物の板権を収集したことも繋がるものであることが捉えられる。それが、籬島は著述の最盛期を過ぎ、吉野屋は板権を手放す退転期に至



る享和三年という時期になって、対象を流行の巡礼地に転ずる企画として、新進勢力の大坂書肆のもとで別作者の手に成ることとなっているのである。そして、『蓮如上人御旧跡絵抄』は、籬島自身の周辺を端緒とする、このような凶会の流行と展開の傍らに、開祖親鸞の高弟二十四輩から中祖蓮如の旧跡に転じる着想で作られたという事情にあるのではないだろうか。

### 三 『蓮如上人御一生記絵抄』との関係

続いて、蓮如関連の書物の系譜との関連の点から本作の成立を考える。近世における蓮如関連の書物については、木越祐馨氏「近世蓮如上人関係版本一覽」(『蓮如上人絵伝の研究』<sup>17)</sup>所収)に、延宝五年から慶応年間にかけての四七点が挙げられている。これを通して観すると、蓮如関連の出版物としては、蓮如の著述、蓮如の伝記、旧跡関連の書がある。蓮如の著述では『正信偈大意』(元禄二年刊)、『浄土真宗選要鈔』(元禄四年刊)、『領解文』(天明七年刊)等が出版されている。蓮如の伝記を著したものには『蓮如上人遺徳記』三卷(延宝七年刊、著者未詳)、『蓮如上人縁起』十卷(安永七年刊、先啓了雅著)、『蓮如上人御一生記』六卷(享保元年刊、著者未詳(寛政三年改版、粟津義圭校閲・序))、『蓮如上人御一生記絵抄』三卷(寛政六年刊、釈了辨著 粟津義圭校閲・序)等がある。旧跡関連の書には本作と『蓮如上人御隠棲実記』(文政一二年刊、止齋老人著)がある。こうしたなか着目すべきことと思われるのが、蓮如の伝記物と本作の関係、とくに『蓮如上人御一生記絵抄』との関係である。蓮如の伝記に関しては、蒲池勢至氏「蓮如上人絵伝の系譜」(『蓮

如上人絵伝の研究』所収)に近世におけるその成立の過程が検証され、二〇〇回忌の元禄年間から蓮如上人像が形成され出し、三〇〇回忌(寛政一〇年)には蓮如上人伝が成立・流布していたことが明らかにされている。『蓮如上人御一生記絵抄』<sup>18)</sup>は、その板本に了辨著、粟津義圭校閲と記されるが、割印帳では著者を粟津義圭としている。了辨については知られるところがないが、義圭は近江国膳所の真宗大谷派響忍寺の住職で、法諱は諦住、寛政十一年に没した人である。高倉学寮に学び、唱導に尽力して三〇点余りの著作をのこし、その業績は後代に影響を与えたことが知られる<sup>19)</sup>。『蓮如上人御一生記絵抄』は半紙本三卷三冊から成り、内容は「蓮如上人御出誕の事并石山寺觀世音奇瑞の事」(卷之上第二)から「蓮如上人御遷化の事并御臨終に遇奉る人々の事」(卷之下第十一)及び「六字の名號奇瑞の事并祖師の尊像現し給ふ事」(同第十二)までの全二九条に蓮如の生涯を綴るもので、吉崎・山科・大坂の御堂建立や各地での教化の事跡に焦点を当てて記す。挿絵が全八図入り、本願寺と吉崎御堂を描く遠景の二図、朝倉敏景への使者を描く一図、加賀一向一揆を描く一図のほかは、蓮如の教化や巡覧を描くものである。

『蓮如上人御旧跡絵抄』を『蓮如上人御一生記絵抄』と照らし合わせたとき、本文内容自体にはこれを利用した形跡などは認められない。しかしながら、題名はこれに倣ったかと思受けられ、遠景と蓮如伝を描く挿絵の構想も類似している(図版後掲)。ここからは、前項で確かめた親鸞(二十四輩物)から蓮如へとという流れと同時に、蓮如関連の書物として、『蓮如上人御一生記絵抄』をうけて対象を伝記から旧跡に転じるという着想もあつたのではないかと考えられる。

#### 四 伊豫屋佐右衛門の出版

板元の伊豫屋佐右衛門は、異氏、屋号は永寿軒と称し、所在は京都醒井五條上ルである。先に触れた『秋里家譜』には「籬島今醒井五條に住す」と籬島の居所を記しており、伊豫屋と籬島がごく近隣に居たことが判る。二者の具体的な交流に関しては知り得るところがないが、伊豫屋は『信長記拾遺』（安永五年刊）および籬島序（作者未詳）の『教訓安楽問答』（享和三年刊）の刊記<sup>20</sup>に名を連ね、前述の末期二作（『蓮如上人御旧跡絵抄』と『赤屋さうし』）を出版する。ここで籬島周辺の近世中後期京都の書肆の在り方を見るべく伊豫屋の業績を整理し、書肆の側から『蓮如上人御旧跡絵抄』の出版について確かめる。

調査したところ、伊豫屋佐右衛門が携わる出版書目として、三三三点が見出された。付表【伊豫屋佐右衛門出版年表】の通りである。活動の時期は、安永二年から天保二年までが確かめられる。このうち最後の天保二年刊『商人買物独案内』（年表33）は、伊豫屋による前言を付した商店一覧の町鑑であるが、刊記の伊豫屋の住所が「四条室町東へ入町」とあり（文政三年題の『女院御書』（年表31）では当初と同じ醒井五條上ルである）、末期に店舗を移転したようである。取扱う書目は、求板書も含めて、仏教関連、小説、相法、漢詩文、俳諧、医学・本草、随筆と手広い。このうち特徴的なものとして、俳書および小説の出版動向について見る。

俳書の出版は、享和三年跋『旅のねさめ』（年表9）、享和二年（文化二年序『松乃葉集』（年表13）、文化三年成『丙寅墨なをし集』（年表19）である。『旅のねさめ』は讃岐の俳諧師素丈坊による撰集、『松

乃葉集』は土佐の俳諧師樂只仙雨洗の撰、備前岡山の任他斎（熊代朝伍。美濃派の系統を嗣ぐ松後（森々庵、寛政十年没）の門人）の點検とする句集である。このうち素丈坊と任他斎については、『旅のねさめ』が、阿波国を遊歴中の任他斎が当地で素丈坊と出会い、土佐に赴く素丈坊におくったとする送別句から始まるという関係にあり、俳人間の交遊からこの二作は括って捉えられよう。『丙寅墨なをし集』は京都東山双林寺の墨直しの行事の歌仙である。伊豫屋は、これら三点の俳書の刊記に「正門（蕉門）俳林」と称しており、現存する諸本も僅かでごく小規模の出版と思われるものの、享和期から文化のはじめにかけて、蕉門の流れを汲む俳書を手掛けている様子が見られる。

小説の出版は、ごく初期のもので籬島の『信長記拾遺』がこれに当るが、その後、文化年間に手塚兎月、盛田小塩等の読本・滑稽本に乗りだしている様子が見える。文化三年刊『古志路の章』（年表17）、文化四年刊『足毛のこまごと』（年表20）、文化四年刊『倭琴高誌』（年表21）、文化五年刊『車僧轍物語』（年表23）、文化七年刊『清正大神祇靈驗記』（年表26）、文化十三年刊『天津羽衣譚』（年表29）である。『古志路の章』と『車僧轍物語』は仇討物の読本である。『車僧轍物語』は割印帳の記載から伊豫屋が主板元と見られ、著者附言末に「文化つちのえ辰の弥生三日京醒井の古跡に筆を染て蓬左亭の間窓に」（傍線引用者）とあることから伊豫屋との関係が推測される。しかしながら作者鶏床主人の人物や他の著作については知られるところがない。

『日本古典文学大辞典』「盛田小塩」の項（美山靖氏執筆）に指摘のあるように、『足毛のこまごと』の二編上巻末に付載の広告には、

「蓑笠雨談續篇近話」とする『小塩筑紫笠』全三冊の近刻広告があり、しかしながらこれは未刊に終わっている。このことに關して伊豫屋の周辺から考えてみる。まず、当該の広告には次のようにある。

此書は先年京都の著述家馬琴篇す所の蓑笠雨談てふ書有然にこたひ其板をもとめける 依て当所盛田小塩山人あるに任せ例の蓑笠の筆を続事を乞ひけるに小塩一とせ西海の波に漂ひ遊吟ありし事を筆に著す 奇談珍話の書也

記されるように、伊豫屋は『蓑笠雨談』を文化三年に求板板行している(年表18)。そして伊豫屋がこの『小塩筑紫笠』を出版した事実は見られないのだが、その一方で籬島の『赤星さうし』が、この広告の述べるところに似通った内容の書物に思われる。三冊から成り、自序に「こゝに先年九州路に往し所聞つゞりし奇談を書集しに書肆永寿軒の需により稲舟のいなみかたく筆に任す」とあるように、籬島の西海路での奇談隨筆集である。『蓑笠雨談』に続くものとする企図の近刊広告の書物は、何らかの事情で小塩作品は板行に至らなかった<sup>2)</sup>。伊豫屋が籬島に同様の作を望み、『赤星さうし』が制作・出版されたことが考えられるのではないだろうか。

特段の専門領域に限らない営業のなかで、以上のようなところには、蕉風復興運動の余韻や江戸に対抗した読本制作といった上方文学界の情勢に連動した一書肆の在りようが見て取れる。そうしたなかで、籬島作品との関わりについて見ると、伊豫屋は籬島の初期作『信長記拾遺』に携わりながらも、地誌類を手がけていないためか名所図会の出版に参入することはなかった。そして、住処の近しさから推測できるような交流があったのだろうか、作者として著名となつてからの老年期の籬島と再び組んで、籬島の得意とする名所物

を生かした着想での小編作品『赤星さうし』と『蓮如上人御旧跡絵抄』を世に出しているのである。

#### 付表【伊豫屋佐右衛門出版年表】

・書名、巻冊、著者、管見板本の所蔵、刊記(年記/書肆)、備考(以下、内容その他)の順に記す。(不明の項目は省略)。  
・刊記に拠り、板行の順に掲げる。  
・所蔵に(国文研M)としたものは、国文学研究資料館蔵マイクロフィルムによる。

1 『辨魔方録』一冊、天倪著、大阪府立大学学術情報センター図書館(国文研M)、安永二癸巳年三月/(京都)永田調治・河南四郎右衛門・伊豫屋佐右衛門 \*真宗。

2 『信長記拾遺』一〇巻一〇冊、秋里籬島著、筆者所持本、安永五丙申正月/(京都)山本平左衛門・田原勘兵衛・出雲寺文次郎・伊豫屋佐右衛門・吉野屋為八 \*軍書。

3 『不動智神妙録』一冊、沢庵宗彭著、カリフォルニア大学バークレー校東亞図書館(国文研M)、安永八己亥載二吉辰/(京都)伊豫屋佐右衛門 \*臨濟・劍術。

4 『片玉六八本草』二冊、加藤謙齋著・加藤玄順編、国立国会図書館蔵、安永九年庚子春三月/(京都)植村藤右衛門・藤屋東七・河南喜兵衛・伊豫屋佐右衛門・文臺屋多兵衛・錢屋新助・梅村市兵衛・浅野彌兵衛 \*本草。

5 『相法無尽蔵』五卷五冊、多田希真著・蘆塚齋校、国文学研究資料館蔵、寛政四年壬子仲夏/(江戸)須原屋茂兵衛・(大坂)敦賀屋九兵衛・(京都)林権兵衛・菊屋長兵衛・勝村治右衛門・伊豫屋

- 佐右衛門 \*相法。割印帳に板元売出し須原屋茂兵衛とする。
- 6 『日本詩選(求板)一〇卷七冊、江村北海編、国立国会図書館蔵、安永三年甲午正月旧刻、寛政六年庚寅正月再刻(江戸)須原屋新兵衛(大坂)河内屋喜兵衛(京都)伊豫屋佐右衛門求板 \*漢詩。『古字千字文』\*未見。日本古典籍総合データベースによる(龍谷大学図書館写字台文庫蔵)。寛政七、伊豫屋板。二冊。梶川光慶著。書道。
- 7 『古字千字文』\*未見。日本古典籍総合データベースによる(龍谷大学図書館写字台文庫蔵)。寛政七、伊豫屋板。二冊。梶川光慶著。書道。
- 8 『仏像図彙(求板)』\*未見。日本古典籍総合データベースによる(駒澤大学図書館永久文庫ほか蔵)。寛政八、伊豫屋板。二冊。土佐秀信著。仏教(絵画)。
- 9 『旅のねさめ』一冊、素丈坊編、国立国会図書館蔵、(京都)巽佐右衛門 \*俳諧撰集。享和三年二月跋。
- 10 『教訓安楽問答』四卷四冊、秋里籬島序、東京都立中央図書館東京誌料蔵、享和三年亥二月(京都)武村吉兵衛・伊豫屋佐右衛門 \*教訓。
- 11 『一休骸骨(求板)』一冊、一休宗純作、石川県立図書館李花亭文庫(国文研M)、延宝三巳卯年九月吉旦 文化二巳丑年五月再刻(京都)伊豫屋佐右衛門 \*広告『一休目なし草』『一休幼草』有。臨済。
- 12 『水鏡注目無草(求板)』一冊、国文学研究資料館蔵、延宝三巳卯年九月吉旦 文化二乙丑年五月再刻(京都)伊豫屋佐右衛門 \*広告『一休目なし草』『一休幼草』有。臨済。
- 13 『松乃葉集』一冊、任他斎掄・只仙選、今治市河野美術館(国文研M)、(京都)巽佐右衛門 \*俳諧。享和壬戌五月・享和癸亥夏、文化乙丑秋序。
- 14 『和蘭医話』二冊、伏屋素秋著、大阪市立大学学術情報総合センター森文庫(国文研M)、文化二年十一月(京都)巽佐右衛門・山口又市(大坂)田原平兵衛・上田吉兵衛 \*医学。
- 15 『観門要義鈔(求板)』\*未見。日本古典籍総合データベースによる(東海学園大学名古屋キャンパス図書館関山文庫)。文化二、伊豫屋版。一五冊。証空著。仏教(観経)。
- 16 『手相即座考』一冊、蘆塚斎著、東北大学附属図書館狩野文庫蔵、文化三年丙寅春(大坂)松村九兵衛・浅野彌兵衛(京都)伊豫屋佐右衛門 \*相法。続編は文政六年刊。
- 17 『古志路の章』六卷六冊、手塚兎月著・谷本月丸画、京都大学附属図書館蔵、文化三丙寅年八月(京都)但馬屋太兵衛・白粉屋與兵衛・野田嘉助・伊豫屋伊右衛門・教来寺彌兵衛・伊豫屋佐右衛門(伏見)亀屋伊兵衛 \*読本。
- 18 『蓑笠雨談(求板)』三冊、曲亭馬琴著、名古屋蓬左文庫(国文研M)、文化三丙寅八月(京都)伊豫屋佐右衛門 \*享和四年初版。随筆。『一休目なし草』『一休目なし艸繪本』『一休幼艸』教訓安楽問答「相法無盡蔵」蓑笠雨談「手相即座考」の広告有。
- 19 『丙寅墨なをし集』一冊、梅古編、京都大学文学研究科図書室蔵、(京都)巽佐右衛門 \*俳諧。丙寅は文化三年か。
- 20 『足毛のこま』と(続編)二卷二冊、盛田小塩著・歌川豊秀画、上田市立図書館花月文庫(国文研M)、(京都)伊豫屋佐右衛門 \*滑稽本。見返に「文化四卯春」。
- 21 『倭琴高誌』五卷五冊、盛田小塩作、国立国会図書館蔵、文化丁卯年三月(江戸)角丸屋甚助(名古屋)菱屋久八(京都)伊豫屋佐右衛門・永田調兵衛 \*読本。仇討物。見返「文昌堂」。



- 22 『日本詩鈔』七卷一冊、源君哲編、福井市立図書館松平文庫(国文研M)、文化四年丁卯八月新刻／(京都)菱屋孫兵衛・林伊兵衛・伊豫屋佐右衛門 \*漢詩。
- 23 『軍僧轍物語』五卷五冊、鶉床主人著・歌川豊秀画、中村幸彦(国文研M)、文化五年戊辰三月吉日発販／(京都)伊豫屋佐右衛門・大和屋吉兵衛・住吉屋嘉兵衛・西田正三郎・白粉屋與兵衛・平田屋吉兵衛 \*読本。
- 24 『浄土宗名目』\*未見。日本古典籍総合データベースによる(東海学園大学名古屋キャンパス図書館関山文庫蔵)。文化六、伊豫屋板。二冊。道観著。浄土。
- 25 『赤星さうし』三卷三冊、秋里籬島著、お茶の水女子大学蔵、文化七庚午秋発行／(京都)永寿軒伊豫屋佐右衛門 \*奇談。
- 26 『清正大神祇靈験記』四卷一冊、鈴木世孝画、国立国会図書館蔵、文化七庚午十一月発行／(京都)大坂屋又三郎・伊勢屋清七・松屋市郎兵衛・伊豫屋佐右衛門 \*靈験譚。
- 27 『日課要訓』\*未見。日本古典籍総合データベースによる(駒澤大学図書館永久文庫ほか蔵)。文化七年、伊豫屋板。一冊。辯才著。浄土。
- 28 『蓮如上人御旧跡絵抄』\*前述
- 29 『天津羽衣譚』五卷五冊、雲沖子作・速水春曉斎一世画、国立国会図書館蔵、文化十三丙子孟春／(大坂)河内屋嘉七・(京都)近江屋治助・丸屋善兵衛・伊豫屋佐右衛門・堺屋嘉七・伏見屋半三郎 \*読本。雲沖子は越後の戯作者。
- 30 『愚要鈔』\*未見。日本古典籍総合データベースによる(三康図書館椎尾文庫蔵)。文政二年、伊豫屋版。三冊。明秀著。浄土。
- 31 『女院御書』二卷二冊、辨才編、陽明文庫(国文研M)、南紀梶取本山蔵・(京都)伊豫屋佐右衛門・総田屋嘉兵衛・総田屋兵右衛門 \*仏書。文政三年題。
- 32 『温泉紀遊』一冊、若霖(汝岱)著、国文学研究資料館蔵、文政六癸未霜月刻成／(京都)伊豫屋佐右衛門・永田調兵衛・(近江)金剛窟蔵 \*漢詩文。
- 33 『商人買物独案内』一冊、たつみ永寿軒述、カリフォルニア大学バークレー校東亜図書館(国文研M)、天保二辛卯秋／(京都)伊豫屋佐右衛門 \*商業。刊記に伊豫屋の住所を「四条室町東へ入町」とする。

注(1) 日本古典籍総合目録データベース(国文学研究資料館)

に三点の所在が記載される。管見の板本では、天理大学附属天理図書館蔵本が宮嶋・伊豫屋板、龍谷大学図書館蔵本と筆者所持本が皓月堂求板本である。

(2) 籬島か別人か明らかにならない籬島軒秋里による文政年間の作を除く。

(3) 本稿における『蓮如上人御旧跡絵抄』の引用は筆者所持本による。図版もこれを使用した。句読点は私に施した。

(4) 『大系真宗史料 伝記編六 蓮如絵伝と縁起』解題(二〇〇七年三月、法蔵館)。

(5) 豊橋市中央図書館蔵。写一冊。自筆とされるこの一点のみ存。天明七年の丹後・因幡方面の紀行である。拙稿「『天橋立紀行』解説と翻刻」『人間文化論叢』六(二〇〇四年三月)に紹介した。

- (6) 浅野三平氏『近世中期小説の研究』(一九七五年、桜楓社「秋里籬島」。
- (7) 拙稿「国文学研究資料館蔵『秋里家譜』翻刻と解説」『国文』一一〇(二〇〇八年十二月)に紹介した。
- (8) 拙稿「吉野屋為八の出版活動」『国文』一〇八(二〇〇七年一二月)に述べた。
- (9) 日下幸男氏・万波寿子氏「正信偈注釈書の出版史研究——付正信偈注釈書刊記集成——」『中世の文学と学問』(二〇〇五年、思文閣出版)。
- (10) 岡村周薩氏編纂、一九七二年、永田文昌堂(一九三六年初版)。
- (11) 『巡礼記研究』四(二〇〇七年九月)。
- (12) 一九三六年、大阪図書出版業組合編・発行。一九九八年、龍溪書舎(復刻版)。
- (13) 朝倉治彦氏・大和博幸氏編『享保以後江戸出版書目新訂版』(一九九三年、臨川書店)。
- (14) 大阪府立中之島図書館編、一九七六年、清文堂出版。
- (15) 河内屋太助の吉野屋からの求板と初期活動については、拙稿「名所図会をめぐる書肆の動向—小川多左衛門と河内屋太助—」『江戸文学』四二(二〇一〇年五月)に述べた。
- (16) 酒田市立図書館光丘文庫蔵本(国文学研究資料館蔵マイクروفイルム)。
- (17) 一九九四年、真宗大谷派宗務所出版部。
- (18) 本稿における『蓮如上人御一生記絵鈔』は筆者所持本による。図版もこれを使用した。
- (19) 『真宗大辞典』(前掲注(10))等に拠る。

- (20) 享和三年亥二月、京都武村吉兵衛・伊豫屋佐右衛門(東京都立中央図書館東京誌料)。籬島の序文に「此ふみ博化堂たつさへ来り題せよと乞ふ」とある。博化堂は相板者の武村吉兵衛である。
- (21) 盛田小塩が千代蔭山人の名で著した『因縁奇談近世風説柳可美』(文化四年九月、江戸丹波屋甚四郎刊。京都大学附属図書館蔵)は、芸州忠海を舞台の一つとし、芸妓が西海に赴く内容を持つ恋愛奇談であるが、広告の『筑紫小塩笠』と関係するものであるかは判明しない。

〔付記〕本稿は、人間文化研究機構・総研大共同研究二〇一二年度第五回「都市風俗画」研究会(於三省堂本社)における口頭発表をもとに、加筆したものです。席上御教示を賜りました皆様に深謝申し上げます。

本稿は、平成二五年度学術研究助成基金助成金(若手研究(B))の成果の一部である。

(ふじかわ れまん) 本学 文学部 日本語日本文学科

キーワード＝蓮如上人御旧跡絵抄、秋里籬島、伊豫屋佐右衛門

図版

(上)『蓮如上人御旧跡絵抄』「大坂津村御堂の図」(一部に後筆の彩色がある。)(下)『蓮如上人御一生記絵鈔』「大坂石山本願寺蓮如上人御堂を建んと思召し巡覧し給ふに十四五歳の児出て聖徳太子の本願縁起の文を解き往昔の宿縁ある事を物語の躰」

